

■ Article

歩き遍路の遍路者にとっての意味と 日常や生き方に及ぼす影響についての考察 (2)

—Cさんの語りを通して—

境 徳子

(大垣市役所・2016年3月卒業生)

楠本和彦

(南山大学人文学部心理人間学科)

要 旨

本稿は、四国歩き遍路の遍路者にとっての意味と日常や生き方に及ぼす影響について、考察した。本稿は、(1) 四国遍路は歩き遍路体験者にとってどのような意味があるのか、(2) 四国歩き遍路体験後の日常生活や生き方への継続的な影響にはどのようなものがあるか、(3) 歩き遍路者にとっての四国遍路空間の特性とはどのようなものであるか、を明らかにすることを目的としたものである。四国遍路歩き遍路体験者であるCさんに、半構造化したインタビューを行い、そのデータをナラティブ・アプローチによって分析・考察した。

目的(1)に関して、①霊的体験 —弘法大師の声—、②お接待 —四国の人々の温かさへの感謝—、③お経をあげながら歩くこと —周りの人や先祖との繋がりがり—、④自然や動物との繋がりの感覚 —生かされていることへの感謝—、の観点から考察した。また、目的(2)に関して、①衆生秘密 —殻を破る—、②即身成仏 —現世を楽しむ—、③人に優しくなる、人を受け入れる、の観点から検討を加えた。そして、目的(3)に関して、①四国曼荼羅の世界、②三密行をすることができる別世界、③ケガレの世界とハレの世界の切り替え、④お遍路さんを受け入れる風潮、の観点から考察した。

キーワード

四国歩き遍路者、意味と日常や生き方に及ぼす影響、ナラティブ・アプローチ

I. 問題および目的

境(2016)は、四国遍路空間(とくにその非日常性)は歩き遍路体験者にとってどのような意味をもつのか、また、四国歩き遍路体験はその後の日常生活にどのような影響を与えているのか、について明らかにしようとしたものである。

楠本・境 (2017) は、境 (2016) では不十分であった (1) 先行研究のレビューを行うとともに、(2) 境 (2016) が四国遍路に関する心理学領域の諸研究の中でどのような位置づけやオリジナリティをもつのかを探究することを目的とした考察を行っている。境 (2016) は、遍路者のインタビューデータの詳細を記述し、そのデータに即したナラティブ分析を施しており、他の先行研究で未検討であった点について詳述しているところに、オリジナリティがあると考えられた。しかし、考察の深化などの点においては、今後検討されるべき課題が残されていた。

そこで、境 (2016) のオリジナリティを活かした、さらなる考察を行うために、楠本・境 (2018) はインタビューデータの再分析を実施し、まず一人のインタビューのデータを再分析した成果を報告している。

本論では、楠本・境 (2018) とは別のインタビュー・データを再分析することによって、これまでに提起された課題について検討を加える。なお、再分析に際しては、インタビューの語りを重視し、それに密着し、その語りを中心にして考察する。現在、四国遍路に関しては、宗教学、仏教学、歴史学、文化人類学、社会学、心理学、教育学など様々な学問領域から研究がなされている。そのような広範な学問領域に亘る先行研究を網羅的に参照することは、筆者らの力に余るため、ここでは主に心理学領域の先行研究を参照し、分析・考察する。

以上のことから本研究では、(1) 四国遍路は歩き遍路体験者にとってどのような意味があるのか、(2) 四国歩き遍路体験後の日常生活や生き方への継続的な影響には、どのようなものがあるか、(3) 歩き遍路者にとっての四国遍路空間の特性とはどのようなものであるか、を明らかにすることを目的とする。

II. 方法

1. 調査方法

四国遍路に行こうと考えた動機、四国遍路中の体験、感情、そしてその後の生き方への影響等は、個人によって様々であり物語性があると考えたため、半構造化したインタビューを用いた調査を行った。

インタビューは、X年9月に、Cさんの自宅にて、著者の一人が実施した。インタビューは約2時間40分であった。

2. インタビュー

①四国遍路の方法として、バスツアーや自家用車を遍路の手段とせず、基本的に歩き遍路を行った人を対象とした。歩き遍路には、一番から八十八番までの寺院を続けて参拝する「通し打ち」と、少しずつ期間を区切って行く「区切り打ち」があるが、どちらの遍路も対象とした。

②本研究では、四国遍路が体験者の遍路体験後の生活や生き方にどのように

繋がっているのかを、実際に四国遍路に行った方の語りから検討することを目的としているため、結願¹し、1ヶ月以上日常生活を送っている人を対象とした。

境（2016）では、上記の2条件を満たした3名（女性1名、男性2名）にインタビューを実施している。本論では、そのうちのCさんの語りに着目し、再分析を行った。

Cさんは60歳代後半の男性で、これまでに歩き通し遍路（4回）、歩き遍路の前に車で24回まわっている。

3. 質問項目

インタビューにおける質問項目は以下の通りであった。

- ①四国遍路を行う前は四国遍路にどのようなイメージを持っていたか
- ②四国遍路に行こうと思った動機
- ③四国遍路で心に残った体験について
- ④遍路を（まさに）終えたときの感覚、気持ちはどうだったか
- ⑤日常生活に戻ってどう感じたか
- ⑥四国遍路体験はあなた（遍路者）にとってどのような意味があったか
- ⑦四国遍路に対して今はどう思っているか

4. 分析方法

インタビュー終了後に逐語録化されたインタビュー内容に対して、再びナラティブ・アプローチによって分析し直すとともに、考察を行った。

Ⅲ. 結果および考察

Cさんは60歳代後半（インタビュー当時）の男性である。30歳代後半に車で四国遍路を始め、合わせて24回四国をまわっている。60歳代前半にはじめてト鉢・野宿で歩き遍路を行い、そこでの経験をきっかけに、ボランティア活動をするようになった。その翌年、高野山大学大学院へ進学し、僧侶の資格をとるなど、意欲的に活動している。調査当時までに通算4回の歩き遍路を行っていた。

まずCさんの四国遍路以前から現在（インタビュー当時）に至るまでの経緯を「Cさんの四国遍路体験」としてまとめる。次に、「歩き遍路中の重要な体験とその意味」について記述し、考察する。さらに、高野山大学大学院で遍路学を学んだCさんの視点を中心にして、「四国遍路体験後の日常生活や生き方への影響」と「遍路者にとっての四国遍路空間の特性」について記述し、考察する。

¹ 八十八カ所全て参拝し終えること

1. Cさんの四国遍路体験

1) 四国遍路に行くきっかけ・動機

Cさんは30歳代後半に車で四国遍路を始めた。そのきっかけは、ある知り合いのお坊さんに「人の気持ちわからんし、痛みもわからへんと。そんな人、タコのクソだって。それを直す方法はもう四国遍路しかないから、あんた四国遍路行きなさいって言われた」(L384~386) ことだった。Cさんは「なんでこんなもん行かないかんのや」(L387~388) と思ったが、「タコのクソっていうのが気になってね。よし、そしたらもう行こか」(L388) と思い、車での遍路に行くことを決めた。その後Cさんは、「車で回っててもね。やっぱりね、おかしなものでね (略) なんか毎年行かなあかんあというので、行くようになったね、ずっと」(L401~402) とあるように、約22年間で車での遍路を24回行った。かつて、Cさんは「人の道外してるようなことを (略) 例えば嫁さんを泣かしてたようなことをね。そういったまあことがあったんだけど。それは(略) 家族と一緒に遍路することによって、それがこうなくな」り (L879~881)、「家庭が (略) 円満になって」いった (L357)。

Cさんは四国遍路に何度も行く理由を以下のように語った。

どうしても(略)生きていく為には(略)人に迷惑もかけてるし(略)例えば、自分の車乗って走るだけでも(略)環境に悪いっていうことをしてる。食事をするのも、色んなものの命を頂いてる。(略)人に悪い事することもある。(略)日常生活の(略)そういったものを年に一回でも巡礼する事によって気持ちをリセットする。(L462~472)

Cさんは、人は生活するだけでも、他の人や生き物、地球環境などに、どうしても迷惑をかけてしまうと考えている。四国遍路では八十八カ所の寺院を参拝し、お経をあげるが、その読経では「まず懺悔」(L478)をし、最後には必ず「皆さんが良くなりますように」(L483)と唱える。Cさんにとって四国遍路は「心を洗い」(L473)、「身体を清め」(L480)、「日常の積もり積もった垢を綺麗にする」(L488) 行為であり、1年の「ひとつの区切り」(L646) となっている。

2) 初めての歩き四国遍路

Cさんは60歳代前半に、はじめて歩きで四国遍路に行くことを決めた。そのときのCさんの心情として「何か物足りない部分」(L269)があった。

田舎から高校卒業して、昼間働いて夜大学行って、で自分の目標だった(略)小さい会社作るというのがあって(略)独立した。(略)で、子供三人できたし(略)そこそこ遊びまわってたし、えー小さな家も買ったし、子どもみんな全員独立したし、というので(略)裸一貫で出てきてそこ

そこ自分ではやってるなって思ってきたんだけど、何か物足りない部分がある。(L264～269)

そのような思いを持っている時に、お遍路を紹介してくれたお坊さんから、托鉢して、野宿で歩いて四国遍路に行けば、必ず弘法大師に会うことができると教えられ、Cさんは「弘法大師さんに会えるから…。もう是非会ってみたい」(L491～492)との思いや「何かが変わると期待」(L494)から、托鉢・野宿による歩き遍路を実践した。

一番から八十八番のお寺まで歩いたCさんであったが、その間に弘法大師に出会うような決定的な出来事はなかった。しかし、八十八番から一番のお寺に戻るため、11月の早朝5時頃に山の中を歩いていた際に、Cさんは不思議な体験した。

声が聞こえてね、今でも忘れないね。「もったいないぞ、もったいないぞ」っていうんですね。んで、「まだまだ力出してないぞ」ってこういうわけ。んで、その時にもう周り誰も居ないから、もうこれはもうお大師さんしかないって思って。(L288～291)

真っ暗な山の中で聞いた声を、Cさんは弘法大師の声だと思った。そして「まだまだ力出してないって、どういうことかな」(L291～292)と思ったCさんは以下のように考えた。

それまで自分のことしか考えてなくて(略)社会に迷惑かけずに、仕事を通じて社会に貢献して(略)家族を大事にして、えー、それで良いんだと思ってる自分がおったけれども、それだけではあかんと。(L890～892)

見返りを求めない、誰が利用するかわかんない人の為にこう(略)お接待してくれた(略)人がおって、四国遍路はできたんだから、自分も(略)そういう気持ちで生活せないかん。(略)行動せないかん。(略)その行動がボランティアだけではないかん。(略)もう少し自分を変えるんやったら、何か他に出来ることないかな。(L851～856)

Cさんは、それまでの人生において「そこそこ自分ではやってるな」(L268)と思っていたが、四国遍路中にお接待してくれた人々とそれまでの自分を比較して、それまで自分が一生懸命やってきたのは、自分や家族という自分の身の回りのことであることに気づいた。そして、Cさんは「ただお四国回るだけでこんなにお世話になったんだから、やっぱりボランティアで人様になんかせん

といかん」(L304~305)と思った。

3) 初めての歩き遍路の後の活動と思い

「ボランティアで人様になんかせんといかん」(L304~305)と思ったCさんは、ヘンロ小屋に関するボランティア活動を始めた。続いて、「もっといろんな形でお遍路さんにお世話できることをしよう」(L310)と考え、公認先達になった。

また、ボランティア活動だけではなく、「もう少し自分を変えるんやったら、何か他に出来ることないか」(L855~856)と考えたCさんは、15年程前から興味を持っていた「奥駈に行きたい」(L897~898)、「お大師さんのことをもっと知り勉強したい」(L312)と考え、大峯奥駈道(おおみねおくがけみち)²に挑戦した。その奥駈の道中で、かつて弘法大師が見たと思われる高野山の景色を見た。その時の体験をCさんは以下のように語った。

奥駈行くと吉野から山上ヶ岳に行く時にね、途中で休憩する時にね、あれがあれが高野山だって言ってね教えてくれるんですよ。ああ、あれが高野山かあって。(略)お大師さんが若い時にね(略)吉野から南に1日、西に2日行って高野山を見つけるっていう文章があるんですよ。弘仁7年の6月に嵯峨天皇が高野山を下さいっていう上奏文、それに書いとるんですよ。そういうね、高野山は私が若い時に(略)青年の時に見つけたんだっていうことを書いとるんですよ。だから、奥駈に行ったことももの凄く大きなことになってるんですよ。(略)そういう意味でまさか、あれが坊主になるきっかけだったのかな。そうなんです。(L551~560)

奥駈で、高野山を見たCさんは、弘法大師が高野山を見つけた体験に思いを寄せた。そのことはCさんが僧侶になる大きな一因となった、とCさんは考えている。

さらに、「お大師さんのことをもっと勉強しようと思ったら」(L313)、高野山大学の大学院には遍路学があると知り、Cさんは「私の為やみたいなものやと思って(略)行こうって決めた」(L313~317)。そして、「せっかく(略)高野山大学まで来たんやから、もう正式なお坊さんになってやる」(L321~322)と思い、僧侶の資格をとり、60歳代後半に高野山大学大学院を修了した。

歩き遍路中「追善供養をずっとしたんですよ。そしたらやっぱりいろんな縁が出てきた」(L515~516)、とCさんは語った。例えば、「今私の先生になってる住職さん」(L525)は、Cさんの両親が四国遍路を通してつながりがあったお寺の住職であり(L524~525)、お遍路を始めた時にCさんに托鉢の仕方を

² 大峯奥駈道とは、吉野と熊野を結ぶ大峯山を縦走する修験道の修行の道であり、弘法大師も修行したといわれる。

教えてくれた人でもあり、その後Cさんが高野山での修行をするための推薦をしてくれた住職でもあった(L516~537)。高野山での「きつい」(L906)行などの様々な場面で、「今私の先生になってる住職さん」(L525)や「乗り越えさせてくれた先生」(L920)達の支えがあったおかげで、いくつもの関門を乗り越え、大学院を修了することができた、とCさんは考えている(L516~539, L906~937)。

歩き四国遍路をきっかけに、公認先達、奥駈、高野山大学大学院への進学、僧侶の免許の取得など、多くのことに挑戦してきたCさんであるが、Cさん自身は自分の殻を「まだ破りきれてない」(L586)といい、インタビュー当時には新たなチャレンジを続けていた。一つには、高野山真言宗本山山布教師になるため勉強をしていたこと、また、僧侶の資格を活かして、お金がなくて葬式をあげられない人の為にボランティア活動をしたり、地元誌での執筆、高野山に関する講演なども行っていた。

このように、歩き四国遍路したことによって「今までしたことなかったことが出来るようになる」(L594~595)り、Cさんの活躍の場が「広がってきた」(L593)。

2. 歩き遍路中の重要な体験とその意味

本節では、目的「(1) 四国遍路は歩き遍路体験者にとってどのような意味があるのかを明らかにする」を達成するために、四国遍路において、Cさんにとって重要であったと捉えることができる体験を取り上げる。

四国遍路してなかったら坊さんになんてなってないから、まあ大学院には行ってないよね。だから(略)今までの殻をこう破る、(四国歩き遍路に行く前は)自分ではそんな、そこまでなと思ってた。(略)だから、そういうことができたというのは、その四国遍路の、凄い、私はおかげなんやね。(L348~353)

Cさんは、四国歩き遍路に行くまでは「自分は一生懸命やってきたという自負」(L351)があった。また「自分では(略)そこまで」(L350)活躍の場が大きく広がるとは想像していなかった。しかし、四国遍路での経験が現在まで「繋が」(L593)ってきた。「野宿の遍路してなかったら今の私はない」(L872)とあるように、托鉢・野宿による歩き遍路体験はCさんの人生における大きな転機であったことがわかる。

本節では、そのような転機を生んだ四国遍路中のCさんの体験を記述し、Cさんにとっての意味について考察する。

1) 霊的体験 一弘法大師の声一

前節にも記したが、「もったいないぞ、もったいないぞ。まだまだ力出して

ないぞ」(L845～846)という弘法大師の声を聞いたことは、Cさんの生き方を一変させる最大のきっかけだったと捉えることができる。Cさんはその声の意味について、歩きながら、さらには日常に戻った後も考え続けた。

「もったいないぞ」って、「まだまだ力出してないぞ」っていう、声を聞いて、意味がわからなかったんだけど。(略)自分でこう歩きながらずっと考えてたけど。そこは、今までの自分というのは、もうほんとに、自分の為、家族の為、もう何事も、もう全部が自分のもう為に、やってたんだけど、これは間違ってるって。こっだけその遍路でお世話になった。(略)ボランティアですよ、見返りを求めない、誰が利用するかわかんない人の為にこう、いろんなことをしてくれてた。お接待してくれた。そういった人がおって、四国遍路はできたんだから、自分もそういう、Y(Cさんが住む都道府県名)に帰ったら、そういう気持ちで生活せないかん。ただそう思うだけではいかんから行動せないかん、というので、いろんな行動に移していった。(L845～854)

「もったいないぞ、もったいないぞ。まだまだ力出してないぞ」(L845～846)という言葉の意味を最初Cさんは理解できなかった。しかし、歩きながら考え続けることを通して、遍路中に受けたお接待のことに思い当たり、日常に戻った後、「見返りを求めない」心で、「ボランティア」という「行動に移して」いくことを決意した(L850～854)、と捉えることができる。

Cさんには、「何か物足りない部分」(L269)があった。そのような思いを持っている時に、お遍路を紹介してくれたお坊さんから、托鉢して、野宿で歩いて四国遍路に行けば、必ず弘法大師に会うことができると教えられた。Cさんは「弘法大師さんに会えるから…。もう是非会ってみたい」(L491～492)との思いや「何かが変わると期待」(L494)から、托鉢・野宿による歩き遍路を実践した。弘法大師に是非会ってみたいという切なる願いをもっていたCさんにとって、弘法大師の声を聴けたことは、その願いが叶った重要な体験であったと推測できる。

しかし、それに止まらず、聴いた当初は、「意味がわからなかったんだけど(略)自分でこう歩きながらずっと考え」(L846～848)る意識的思索を行ったことが、この声が伝えんとすることを生き方の中で実現していくことができたと一因であると考えることができよう。

さらに、後述するように、この声の意味することを実現し、次々と自分の「殻を破る」(L352)ことができ、それまでとは生き方を大きく転換できたことが、この体験をより意味深いものになっている、と考えることができる。

福島(2004)は、遍路中の霊的体験は、その前後の生活や人生も含めた一つの遍路物語であり、それぞれの遍路者が霊的体験をどう意味づけていくかとい

うことこそが重要で、自分なりの意味づけがなされれば、その体験を自分の遍路物語に組み入れ、生活や人生において建設的な形で活かしていくことができるとしている (pp.200-201)。Cさんは、福島 (2004) が言うように、弘法大師の声の意味を自分の人生の中で意味づけることができ、建設的な形で実現していった、と考えられる。

2) お接待 —四国の人々の温かさへの感謝—

Cさんにとって、お接待は、「人のありがたさ」(L966) が本当によくわかった体験であった。

人のありがたさっていうか、生かされてるとというのが、ほんつとにわかりました。(略) 四国の人々の温かさ、それはお大師さんに対する温かさなんですけど、同行二人 (略) お大師さんと歩いてる人っていうので。(略) 通学してる小学生からも (略) おじさん頑張って、とかね。(略) 山の中歩いてたらお遍路さん頑張ってくださいとか。(略) 休憩する小屋とか、寝る小屋とか作ってくれたり (略) 四国の人々のありがたさがわかる。んで (略) 感謝できる (略) 気持ちになれる。(略) だから、人に優しくなるじゃないですか、うん、誰にでも、帰ったら。(L966~980)

野宿かつ托鉢で歩き遍路をしていたCさんにとって、食べ物などのお接待はもちろん、休憩所や、通夜堂・ヘンロ小屋など宿泊できる場を設けていてくれることは、とてもありがたいことであった。また四国の人からの励ましの言葉がCさんには嬉しく、心に残るものであったことがわかる。このような無償の人の温かさに触れ、Cさん自身も日常に帰ってきてからも「皆さんのおかげで、生活してるんだから」(L893)、「感謝」(L977~978) の気持ちを持ち、「人に優しく」(L980) しようと考えたと思われる。

先行研究でも、「お接待」や「感謝」について触れている論文は多く (福島, 2004など)、歩き遍路者に共通する重要な体験や思いである、と理解できる。福島 (2004) は、お接待が歩く上で励みになること、生きていく術になっている人もいたり、お接待されることで自分がお遍路であることを強く自覚し、それは信仰心の変化とも関連がある、と述べている。また、彼女によれば、お接待や声かけを受けるうちに、人の優しさが身にしみ、お返ししていこうとの気持ちが強まっていくこと、遍路を歩き通す原動力になるなど、身体・心理・社会すべての効果を引き起こす土壌となっている (pp.204-206)。福島 (2006) は、自己探求・安定期では、接待など周囲の行為に思いをはせるなど生かされていると感じ、世話になった分はお返しをしたい、自分も人のために役立ちたいなどと思うようになるとしている (p.408)。高橋 (2012) も、「お接待」は、遍路者に四国の人々に「見守られ、助けられたという実感」を与え、遍路者が

「自己の変化に気づき、感謝に至る過程」を支援すると報告している (p.101)。

3) お経をあげながら歩くこと 一周りの人や先祖との繋がりー

お経をあげながら歩くことを歩き遍路の途中で知って以来、Cさんは、四国遍路をしている間、「ずーっと (略) お経あげながら歩いた」(L508)。両親、親戚、仕事の取引先の人など生きている人には「感謝のお経」(L163, 544)を、顔も知らないような祖父母、曾祖父母などの先祖など亡くなった人には「追善供養」(L162, 515)を、「ひとりひとりずーっと名前を言って」(L543~544)、「一歩一歩お経を」(L161)あげていた。

今まで自分がこう生まれて関わってきた人。でも顔も知らないけどおじいちゃんおばあちゃん、私を知ってるのは両親の両方のじいちゃんばあちゃん1人しか知らないからね。(略) それでも、だから私がいてるっていうのは、親父がいて、その親父や両親や、ほしたら母親の両親や (略) でもその人がおったから、ああこの人も供養せないかなあ。(略) ずーっとそのお経あげながら歩いたんですよ。(略) そういうふうにならなくなってきたんです。だから供養の連続。そんな供養したことなかったなあ、と思った。(L501~511)

四国遍路中、一歩一歩が供養の連続であり、今までしたことのない供養を行うことを通して、Cさんは先祖との繋がりを感じていった、と理解できる。

さらに、先祖との繋がりを感じる次のような出来事もあった。歩き遍路でCさんの母親の実家に立ち寄った際に、Cさんの曾祖父さんの納経帳が出てきた。Cさんは「追善供養をずっとした。(略) そしたらやっぱりいろんな縁が出てきた」(L515~516) ことに対して、「すごいなあ」(L512) と思った。

Cさんは、「感謝のお経」(L544) や「追善供養」(L515) を行ったことが「あったからひょっとしたら坊さんになったのかもわからん。(略) はじけるような部分があったのかもわからん」(L546~547) と語っている。お経をあげながら歩き、周りの人や先祖との繋がりを感じることができたことは、後述するように、遍路後にCさんの生き方・人生の大きな転機があり、僧侶になるなど思いもかけなかった人生の展開が生まれた一つの要因と考えることができる。

先祖供養は、四国遍路における主要な動機の一つである。しかし、楠本・境(2017) がレビューした心理学領域の文献には、歩き遍路者の先祖供養や先祖との繋がりに関して詳述した研究は見いだされていない。ただ、楠本・境(2018) のインタビューであるBさんには以下のような語りがあった。「だから四国を歩いて、一番何が (略) 今までで良かったかっていうと、やっぱりそういう両親、まあ産んでくれたこと、もう自分が存在すること自体の、その両親がおれへんかったらあかん訳やんかね。でそういう、あの今まで当たり前やと思

うてたそういったことに、ほんまにこう、感謝できるっていうか。(略)それは、まあ四国行った一番大きい(略)効用っていうか、うん、効果やったと思うね、今、思うとね」(L935～940)(楠本・境, 2018, p.46)。「Bさんは、四国遍路を通して、両親に対する感謝が『腑に落ち』(L950)た。先祖供養に関しても、『お題目じゃな』(L955)く、『凄く自分の中ではリアリティー』(L954)を感じるようになってきた。それは、『凄い奥底の方に感謝するもの』(L954～955)だとBさんは考えている。『命の集大成』(L958), 『命の繋がり』(L972)で、自分が『今生きてるっていう』(L973)実感をBさんはもつことができた」(楠本・境, 2018, p.47)。

上に挙げたBさん同様、Cさんにとって、四国遍路において「ずーっと(略)お経あげながら歩いた」(L508)体験は、先祖や周りの人との繋がりを感ずることができた重要な体験であったことがわかる。

4) 自然や動物との繋がりの感覚 一生かされていることへの感謝一

本節の2で取り上げたように、Cさんにとってお接待は、「人のありがたさ」(L966)が本当によくわかった体験であり、「感謝」(L977～978)の気持ちをもたらしてくれるものであった。Cさんは「遍路に行くと、人のありがたさっていうか、生かされてるとというのが、ほんつとにわか」(L966～977)った。

また、3)に記した先祖との繋がりの感覚は、生かされているという感覚への広がりをもったものだと思われる。

自分も一人じゃないんだ。生かされてるっていうのは、もうその繋がりですよね。先祖との繋がり、だから、動物との繋がり、まあ自然との繋がりがもそうですけど、そういうのが、ありがたいことやと思うんやね。
(L989～992)

Cさんは、人だけでなく動物や自然との繋がりによって、自分は生かされている、一人ではないという気づきに至ったと考えられる。そしてそのことへの感謝を感じている。

高橋(2012)は、結願し一番札所に向かう途中に起こった、「柔らかな春の光の中で『草や木や鳥や風や雲にすらも僕は生かされている。』一瞬涙腺が緩む。深呼吸しながら細胞一つ一つに今の心のざわめきを刻み込むとしよう」との遍路者(事例2)の思いを記している(p.97)。藤原(2000a)は、四国遍路者の遍路前と遍路後の心理的变化を明らかにすることを目的として、歩き遍路体験者である僧侶7名に対して面接を行い、そのデータを基に事例研究を行った。その中で、遍路中の感情状態として調査対象者Bは「人間は一人では生きられないものだという事」、「人の温かい心や自然の素晴らしさからこう感じた」と語っている。また、Fは「生かされている」、「自分はすごく小さい」と述べ

た (pp.111-112)。藤原 (2003) は、四国遍路の手記の内容分析を行い、KJ法により、遍路経験を構造化したところ、一つの島のタイトルは「おかげの自覚」であり、その中に「多くの人々の支え」、「皆に生かされ皆を生かす」とのカードが含まれていた。

ある知り合いのお坊さんから四国遍路に行く前に、「人の気持ちわからんし、痛みもわからへんと。そんな人、タコのクソだって」(L384~385) 言われた。そのような、かつてのCさんと比較すると、「繋がり」(L990) の中で「生かされて」(L990) いることが「ありがたい」(L991) と感じる思いの発現は、歩き遍路を体験することによる重要な心理的变化であり、生き方を変える大きな要因の一つであると考えられる。

後述するように、「殻を破る」(L352) ことはCさんの生き方が大きく変わるための重要な要因である。しかし、「殻を破る」(L352) ことは一人で成し遂げられることができなかった。殻を破るためには、Cさんにとって繋がりが重要であった。「繋がり」(L990), 「生かされて」(L990) いることへの気づきは、托鉢・野宿による歩き遍路によって、Cさんにもたらされた。「感謝のお経」(L163, 544) や「追善供養」(L162, L515) を、「ひとりひとりずーっと名前を言って」(L543~544), 「一步一步お経を」(L161) あげることを通して、Cさんは、「繋がり」(L990), 「生かされて」(L990) いることへの気づきを深めていった、と理解できる。

本節では、歩き遍路中のCさんにとっての重要な体験とその意味を、1) 霊的体験 —弘法大師の声—, 2) お接待 —四国の人々の温かさへの感謝—, 3) お経をあげながら歩くこと —周りの人や先祖との繋がり—, 4) 自然や動物との繋がり —生かされていることへの感謝—の観点から記述・考察した。「お大師さんに触れるには『つながり』を感じたときである (ママ)。四国の自然、お寺での勤行と祈り、地元の人たち、お遍路仲間にふれたときにお大師さんが現れる。このような関係性によってお大師さんのこころの働きが生じるときに宗教性 (神聖性) に触れるといえる。それは『ありがたい』とか『感謝』の気持ちが湧いているときなのである」(黒木, 2009, p.72)。上に考察してきたように、Cさんは四国遍路空間を歩く中、人の温かさを感じる、繋がり —のなかで生かされている— を感じるといった心境にあった。それらのことが基盤となり、総合されて、Cさんは弘法大師の声を聴くことができた、と考えることができよう。これらの体験や心境の変化は、Cさんの生き方を変える大きな要因であったと考えられる。

3. 四国遍路体験後の日常生活や生き方への影響

本節は、目的「(2) 四国歩き遍路体験後の日常生活や生き方への継続的な影響には、どのようなものがあるか」を明らかにするために、歩き遍路後に生じ

たCさんの日常生活や生き方への影響や変容を記述し、考察する。その際、大学院で遍路学を学び、僧侶でもあるCさんの知識を踏まえて考察する。また、必要に応じて、心理学領域の先行研究の知見を利用する。

1) 衆生秘密 一般を破る一

Cさんの歩き遍路体験に関する最大の特徴は、遍路後に生き方・人生の大きな転機があり、僧侶になるなど思いもかけなかった人生の展開があったことである。

前述したように、初めての歩き遍路の後、ヘンロ小屋のボランティア、公認先達、大峯奥駈道での修行、高野山大学院への進学、僧侶の免許の取得、お金がなくて葬式をあげられない人の為のボランティア活動、地元誌での執筆、講演、高野山真言宗本山布教師になるための勉強など様々な活動を、Cさんは積極的に行い、活動の場が大きく広がった。

「歩き遍路中の重要な体験」としても述べられている通り、Cさんはこのような活動を行うようになったのは、歩き遍路のおかげであると考えている。

歩き遍路することによって、自分の殻を完全に破ることができた。(略)

それまでの自分とは違う、自分を(略)見つけたというか(略)発見したんでしょうね。自分の内なる、内に持ってたもの(略)が、出てきた。

(L882~884)

活動の場が大きく広がるという人生の展開に対して、Cさんは弘法大師の「衆生秘密」(L245)という教えと結びつけて考えている。Cさんによると、衆生秘密とは、その人には「まだまだ出来る能力があるのに発揮してない所」(L123~124)であり、「お大師さんは衆生秘密ってのを非常に重要にして(略)その人の持つるものを最大限に出しなさい活かしなさいという、強く生きなさい、能力を発揮しなさい」(L570~572)と教えた。Cさんは、「後からやけど、お大師さんのこと勉強し(略)はじめて、あああれはそういうことなんだなって」(L573~574)、自らの歩き遍路体験を弘法大師の教えと結びつけて理解することができた。

Cさんは、歩き遍路後の自分の活動の広がりを「衆生秘密」(L245)という教えを用いて以下のように語っている。

衆生秘密というその人の持つる能力を最大限に出すってということなんです。私四国遍路してなかったら坊さんになんてなってないから、まあ大学院には行ってないよね。だから(略)今までの殻をこう破る。(四国遍路に行く前は)自分ではそんな、そこまでなと思ってたのが、自分はそれまで、それでも自分は一生懸命やってきたという自負があったんだ

けど、それがまだまだダメだという事を、ほんに気づかされて、その殻を破ると言うんですか。だから、そういうことができたというのは、その四国遍路の、凄い、私はおかげなんやね。(L348～353)

Cさんには「もったいないぞって、まだまだ力出してないぞっていう、声を聞いて、(略)一種の目覚め」(L845～847)があった。今までの生き方では「まだまだダメだという事を、ほんに気づかされて、その殻を破る」(L352)ことができた。そして、「本来持つてる力を出」(L830)すことができた、とCさんは考えている。「自分の限界、私はこれが限界だ、自分はこれがいいと思ってるその殻を破れさす、さしてくれるところというのが(略)四国遍路」(L245～247)なのである。

福島(2004)は、遍路者が育んでいく信仰心とは、何らかの宗教に入信しようとか、本を読んで教義を学ぼうとか、出家しようというような類の信仰心ではなく、宗教心と呼ぶより、お地蔵に供物を供え、手を合わすというような生活態度として実践される感謝のこころ、風景に溶け込み生活に根ざした慈悲のこころではないか、としている(p.198)。それに対して、Cさんは、「実際、私のような遍路から坊さんになった人って、意外といてるんです。(略)私が(略)ネットで知り合った、三人文珠さんって行って、四国徳島で住職してる人もそうやったんやけどね。お遍路さんから」(L956～959)と述べている。心理学領域の先行研究には、この点に関する体系的な研究が見当たらなかった。そのため、本論では、福島(2004)に、遍路中に啓示を受け、ただちに僧侶になった遍路者の例(pp.231-232)と先達を目指している遍路者の例(pp.246-250)が記されていることに触れるに止め、この点に関して、これ以上の言及は控えない。

僧侶としての遍路者を扱った類似のテーマに関する研究としては、藤原(2000a)がある。彼は、四国遍路者の遍路前と遍路後の心理的变化を明らかにすることを目的として、歩き遍路体験者である僧侶を対象として面接による事例研究を行った。調査対象者Bは遍路後の自己変容として、「自分は宗教家故に人の役に立ちたいという心が強く芽生えた感じ」、「弘法大師の教えを広めていく自信」を挙げた。Dは「修行の一段階を終えた喜び」、「真言行人としての自覚が深まり、仏法に対する姿勢がしっかりした」と述べた。Gは「信仰が確立した(お大師様が今もお我々衆生を守ってくださっていることは理解していたが巡拝することによって確かに)」と語った。藤原はこの3名の巡礼効果を「僧侶としての自覚深化」と解釈している(pp.111-114)。藤原(2000a)の調査対象者は元々僧侶であるため、Cさんのように歩き遍路後に僧侶になったケースとは、同じではない。しかし、歩き遍路が僧侶としての信仰の深まりを促す場合があることの一例と理解することはできよう。

Cさんが次々と殻を破り、僧侶になるまでに至ったことについての語りは、

オリジナリティのある、貴重な語りであると考えられる。

2) 即身成仏 一現世を楽しむ一

歩き遍路は、Cさんの日常生活での心境にも影響を与えたと考えられる。歩き遍路から日常生活に戻ってきた後の心境に関して、「日常で嫌とかいうことはまず無いですよ」(L802)、「お大師さんは、この世を楽しんで生きなさいって人ですから」(L811～812)と、歩き遍路のCさんへの影響を語っている。

考え方がいつもポジティブで前向きだから、後ろ振り返るという事が無いのよ。そういうのは、ほんとお遍路してたらそうやろね。(L688～690)

考え方がポジティブで前向きなのは、お遍路の影響であることが語られている。「えらい変わったと思うてる」(L694)とあるように、歩き遍路以前の自分とは「えらい違い」(L693)なのである。そして、「段々段々意識が強くなって。(略)変な意味での開き直りになってきてるんかなあ」(L680～681)とあるように、時間を経るごとに徐々に強くなっていっている感覚であることがわかる。

このような心のありようをCさんは、弘法大師の教えの「即身成仏」(L819)と繋げて考えている。Cさんによると、弘法大師は、「生きてる親からもらった身体そのまま、身体で、この世で(略)幸せにならなあかん、成仏」(L21～22)する。「現世、今行きてる今を大事に、今生きてる今を楽しまなあかん。今生きてる今を幸せにならなあかん。それが即身成仏やからね。(略)今が一番最高といえる生活にせなあかんわけよ」(L818～821)と教えた。また、Cさんは以下のようにも説明している。

お大師さんは、この世を楽しんで生きなさいって人ですから。もの凄いい前向きで、もの凄いい。その、要はね、抑えるんじゃないで、抑えを取り払ってとっととやりなさいって。欲は持ちなさいって。欲は持っても大きな欲にしなさいって。小さな欲はあかん。大きな欲ってというのは、大小の大じゃなくて、仏さんのような気持ちってというのはもの凄いい大きい、皆の為の欲ってというような意味、最終的に。だから、稼ぐ能力のある人はとんと稼ぎなさい。で、そんだけ稼いだら困っている人に施してあげなさい。皆さん能力は違うわけやから。(L811～817)

このような「即身成仏」(L819)の教えに従い、Cさんは「自分が体験した(お遍路の)良い世界を広めよう(略)勧めようっていう気に今なって、それを伝えようとしてる」(L802～804)。この活動は「大きな欲」(L814)、「もの凄いい大きい、皆の為の欲」(L815)に基づいた活動であろう。また、「奥駈ってというのは、ほんとに修行で、きついんだけど、それを楽しみにしてる。もうほん

と楽しみで楽しみで。(略) 山でほら貝吹いてたら、ええなあ、よし法螺の練習しようとかね。(略) 法螺を練習するようになったり」(L360~363)と奥駈を楽しんでいる。「もうでも本当はもう行きたくて行きたくて仕方ないですよ。でもいっぱいあるからどのコースで行こうと思って。(略) 今度はいきなり歩いて108つ全部行けるかなとかさ」(L725~726)と、お遍路に関しても、楽しみに計画している。

「現世、今生きてる今を大事に、今生きてる今を楽しまなあかん」(L818~819)という「即身成仏」(L819)の教えは、前節に記した「殻を破」(L352)り、「本来持つてる力を出」(L830)し、「今までしたことなかったことが出来るようにな」(L594~595)ることを促進した重要な一要因であると、推測することができよう。

3) 人に優しくなる、人を受け入れる

四国遍路におけるお接待は、Cさんにとって、「人のありがたさ」(L966)が本当によくわかった体験であった。歩き遍路での「人のありがたさ」(L966)がわかる体験が、日常や生き方にどのように影響したか、Cさんは以下のように語った。

人のありがたさっていうか、生かされてるとというのが、ほんつとにわかりました。(略) 四国の人のがありがたさわかる。んで(略) 感謝できる(略) 気持ちになれる。(略) だから、人に優しくなるじゃないですか、うん、誰にでも、帰ったら。(略) 皆を、いろんな形で受け入れようという。(略) 優しさの表れだけど、こう排除するっていうんじゃないくてね、受け入れようという。(略) もう皆、その人の能力は違うわけですから。(略) それを認めようとかね。そういう気持ちになれるんだよな。(L966~987)

歩き遍路を通して人のありがたさがわかった体験が、日常生活で「誰にでも」(L980)、「優しくなる」(L980)というCさんの気持ちに繋がっている。また、人それぞれの能力の違いを認め、皆を受け入れようという気持ちにCさんはなった。

Cさんは、ヘンロ小屋のボランティア、公認先達、お金がなくて葬式をあげられない人の為のボランティア活動などを行ってきた。それは、「ボランティアで人様になんかせんといかん」(L304~305)、「もっといろんな形でお遍路さんにお世話できることをしよう」(L310)、「遍路に対するお礼を兼ねたというボランティア」(L896)という気持ちの発露であった。これらの活動も「もの凄い大きい、皆の為の欲」(L815)に基づいた活動と考えることができる。

歩き遍路者は、接待など周囲の行為に思いをはせるなど生かされていると感じ、世話になった分はお返しをしたい、自分も人のために役立ちたいなどと思

うようになる（福島，2006，p.408）。

Cさんは四国遍路に行く前には，ある知り合いのお坊さんから「人の気持ちわからんし，痛みもわからへんと。そんな人，タコのクソだって」（L384～385）と言われた。「誰にでも」（L980），「優しくなる」（L980），「皆を，いろんな形で受け入れよう」（L984）というCさんの気持ちの変化は，歩き遍路による重要な心理的变化であり，生き方を変える大きな要因の一つであった，と考えられる。

4. 遍路者にとっての四国遍路空間の特性

本節では，目的「(3) 歩き遍路者にとっての四国遍路空間の特性とはどのようなものであるか」を明らかにするために，Cさんの語りに表れた四国遍路空間の特性を記述し考察する。

1) 四国曼荼羅の世界

Cさんは，四国遍路空間は「四国曼荼羅の世界」（L191）であるという。

インタビュー冒頭で，Cさんは胎蔵曼荼羅と四国遍路空間の関係について語った。胎蔵曼荼羅は大日如来を真ん中に配置し，その東西南北に仏様が描かれている。そして四国は東に徳島，南に高知，西に愛媛，北に香川という4県から成っており，その中にお寺が「上手く（略）配置されてる」（L10～11）。したがって，四国遍路をすることは「胎蔵界の曼荼羅を歩く」（L10）ということであるという。

「誰でもおいで」（L233）というのが弘法大師の「教えの根本」（L234）にあることから，四国遍路では老若男女，信仰がある人ない人，外国人など様々な人がおり（L211～213，L229～231），また人それぞれ動機や回り方，宗派なども多様である。四国遍路の寺も「真言宗以外の寺もあるわけですよ。（略）天台宗のお寺もあるし，曹洞宗のお寺もあるし（略）臨済宗のお寺もあります。時宗（略）のお寺もある」（L213～215）。このような「ごちゃごちゃ（略）いろんなものがある」（L220）ことは，弘法大師が「一番（略）理想とする曼荼羅」（L231～232）であるとCさんはいう。

心理学領域の先行研究においても，四国遍路が一種の聖地巡礼であることに焦点を合わせた言及がある。藤原（2003）は，巡礼を巡礼心理療法と捉えようとする中で，巡礼心理療法の鍵となる要因の一つとして「四国全体を曼荼羅と見立てるコスモロジー（世界観）」を挙げている（p.89）。黒木（2009）は，心理療法と四国歩き遍路との類似点を指摘する中で，四国は，地理，風土，気候などの自然と1200年の歴史と文化が含まれた「肥沃なこころの空間」であると述べている（p.62）。

Cさんは，曼荼羅について，高野山の例を挙げ，次のように説明している。高野山には，寺だけでなく，コンビニ，ガソリンスタンド，散髪屋，スナック，

お土産屋さん、銀行、病院、消防署、警察署、学校など (L222～226)「ごちゃごちゃ(略)いろんなものがある」(L220)。「これが曼荼羅なんですよ。曼荼羅ってのは宇宙ですから。(略)そこにお寺だけしかなかったら、また別のものじゃない」(L226～227)。

上に挙げたCさんの言う曼荼羅の特性は、福島(2006)が「日常と非日常の交錯」として、言及していることとも関連していよう。彼女は、四国遍路について、次のように述べている。四国遍路は霊場であるが、人里離れた山中に籠るわけではない。遍路者が歩く道の多くは、車道や路地、住宅地、畦道など生活感や人の気配のある場所である。山の中にいてさえ、民家、地蔵やお供え物から生活者の臭いを感じる。住民にとっての生活の場が遍路者にとっての巡礼の場という、日常と非日常が交錯する構造を成している(福島, 2006, p.406)。この言及は、Cさんの言う「四国曼荼羅の世界」(L191)という特性の一部を示すものであろう。福島(2004)は、日常との関わりを失うことなく非日常体験をした人は、割り切れなさ、面倒、ささやかさ、困難を投げ出さない。遍路を歩いた人が遍路で受けた恩を忘れることがないならば、自分が受けた分、お返ししていこうとするならば、地に足をつけて生きる堅実さ、強さ、柔軟性を培ったゆえではないか、としている(pp.213-214)。

「胎蔵界の曼荼羅」(L10)を「同行二人」(L71)で歩くため、「お遍路は(略)特別」(L70)なのである。Cさんにとって、四国遍路空間は、普段の日常とは全く異なる「別世界」(L66)であり、「四国曼荼羅の世界」(L191)という特性をもった聖地である。このことが、遍路空間の特性における一番の基盤として重要な意味をもっている、と考えることができる。

2) 三密行をすることができる別世界

真言密教の修行に三密行というものがあり、「三密行をすることによって即身成仏に至る」(L33)ことができる。三密とは身密、口密、意密であり、Cさんによると、「お遍路さんは知らず知らずのうちに(略)身口意行という三密をやってる」(L48～49)。遍路者が知らず知らずに行っている三密行をCさんは以下のように述べている。

印を結ぶ。(略)手によっていろいろその仏さんの姿を作る。(略)白装束になりますよね。(略)お遍路さんの杖を持つ。(略)数珠を持つ。(略)(金剛杖や数珠を)持ってたなら(略)両手でこう(拝むことが)できないから(略)片手で(拝む格好を)する。これが身密。(L35～53)

口(密)は(略)勤行する。(略)般若心経を唱えたり、えーお大師さんの御宝号を唱えたり、そのお寺の本尊さんの真言を唱えるということ。(L55～57)

意密っていうのは(略)その道中,道中にいつも私は同行二人。同行二人っていうのはお大師さんと一緒に意味。心はいつも仏さんと一緒なんだっていう心。(L58~60)

Cさんによれば、遍路者が知らず知らずのうちにやっている身密とは、お寺でお経をあげているときの格好である。お遍路を行う人は白装束となり金剛杖と数珠を持っている。それらを手に持った状態でお経をあげるときに、自然と手に印を結んでおり、それが身密になっている。口密は八十八ヶ所のお寺でお経を口に出してあげることである。意密は同行二人という心であるという。

黒木(2009)は、心理療法と四国歩き遍路との類似点を指摘する中で、遍路における治療は、八十八ヶ所の札所の巡拝、各札所における参拝の作法と読経の手順、十善戒と無財七施の実践が、自分を律する枠組となり、遍路を全うするための守りとなるとしている(p.63)。

Cさんによると、「坊さんみみたいな(略)行をしなくても、お遍路するだけでそういうこと(三密行)ができていうことなんです。だからそこはもう別世界」(L65~66)であり、それは、四国が「聖地というのそういう謂れ」(L67)、「聖地と(略)言われる訳」(L67)である。

3) ケガレの世界とハレの世界の切り替え

Cさんは四国遍路空間について、奥駈行における考えを用いて、以下のよう

心を洗いにいく。(略)ケガレの世界とハレの世界(略)の切り替えをする。山の行の場合ではそういう言葉使うんだけど。四国遍路ではそれあんま使わないけど(略)奥駈行という、山伏の行とはそういうことなんですよ。ケガレとハレと、切り替えをするという。(L473~476)

Cさんは、人は生活するだけでも、他の人や生き物、地球環境などに、どうしても迷惑をかけてしまうと考えている。

日頃の生活の中でいうのはどうしても(略)心が汚れるっちゅーのはね、どういことかっていうとね、生きていく為にはいろんなこと、殺生もいっぱいしてるしね。(略)人に迷惑もかけてるし。(略)例えば、自分の車乗って走るだけでも(略)環境に悪いっていうことをしてる。食事をするのでも、色んなものの命を頂いてる。(略)人に悪い事することもある。(略)日常生活の(略)そういったものを年に一回でも巡礼する事によって気持ちをリセットする。(L462~472)

Cさんは、人は生きていくために、どうしても迷惑をかけてしまう存在であるからこそ、「日々の積もった垢を、それを綺麗にする為に聖地巡礼をする」(L647) ことが1年の「ひとつの区切り」(L646)になる、と考えている。そして、四国遍路における読経と関連させて、以下のように説明する。

四国に行って日常のことは全て忘れて、ただひたすらお参りする。まず懺悔をする。(略)自分を、身体を(略)清めていく。皆さんも良くなりますようにと(略)最後に回向する。(略)この功德を皆さんに及びますようにという、皆良くなりますようにと言う。(L473~482)

四国遍路では八十八ヶ所の寺院を参拝し、お経をあげる。読経で「まず懺悔」(L478)をし、「心を洗い」(L473)、「身体を清め」(L480)、「日常の積もり積もった垢を綺麗にする」(L488)ができる。Cさんは、四国遍路が「ケガレの世界」(L473)を「リセット」(L472)できる「ハレの世界」(L473)である、と考えている。

そして、歩き遍路中の時間は、Cさんにとって、「仕事も家の事も忘れてただひたすらそういうお経を唱えて回る」(L97~98)、「ゆったりした時間が持てて、自分が今まで生きてきた事を、思い考える時間だから、もう最高の贅沢」(L995~996)でもある。

4) お遍路さんを受け入れる風潮

四国遍路では、老若男女、信仰がある人ない人、外国人など様々な人がいる(L211~213, L229~231)。また、人それぞれ、動機や回り方なども多様である。「誰でもおいで」(L233)というのが弘法大師の「教えの根本」(L234)にあり、四国には「お遍路さんを受け入れる風潮」(L89)がある。福島(2006)は、四国遍路の遍路者にとっての意味空間の一側面として、「受容的空間」を挙げている。霊場、大師信仰、接待という内面的構造によって、遍路を巡る動機、年齢、性別、職業、信仰する宗教、国籍を問わず、一介の遍路者として受け容れられる、とする(p.406)。

四国の人々の遍路者へのお接待は、「お遍路さんを受け入れる風潮」(L89)の具体的な表現の一つである。Cさんは、歩き遍路中に四国の人々から善根宿や通夜堂、トイレ、食べ物、また人からの心遣いなど、たくさんの温かいお接待を受けた。

お遍路さんを接待するんだけど、お大師さんに接待してるという、そういう、四国には風潮が残ってるんですよ。(略)お遍路さんを受け入れる風潮がある、別世界なんです。(L88~90)

四国は「同行二人」(L71)である、お遍路さんという「特別」(L70)な存在に、「手を合わせたり、お接待」(L73)し、「受け入れる風潮がある、別世界」(L89)である、とCさんは捉えている。

心理学領域の先行研究において、お接待は、頻繁に取り上げられるテーマである。福島(2004)は、お接待が歩く上で励みになること、生きていく術になっている人もいることや、お接待されることで、自分がお遍路であることを強く自覚し、それは信仰心の変化とも関連がある、とする。また、お接待や声かけを受けるうちに、人の優しさが身にしみ、お返ししていこうとの気持ちが強まっていくこと、遍路を歩き通す原動力になるなど、身体・心理・社会すべての効果を引き起こす土壌となっている、としている(pp.204-206)。高橋(2012)は、主に民間的ケアの観点から、「お接待」に関して総合的に考察し、「お接待」には次の4つの「ケアの要素」が含まれているとする。すなわち、①接待者は、遍路者の行動を注意深く観察し、必要な配慮支援を行っている、②「お接待」は、遍路者に四国の人々に「見守られ、助けられたという実感」を与えている、③「お接待」を通して「接待者自身」も思いをはたしている、④「お接待」は遍路者が「自己の変化に気づき、感謝に至る過程」を支援する(p.101)。大師信仰に関して、黒木(2012a)は、お接待を接待する人と遍路者それぞれの表層意識レベルと深層意識レベルから考察している。お互いの表層意識レベルでは、目に見えるお接待(金品)とお札(納札)が行きかうが、深層意識レベルではお互いのお大師意識が交流していると考えている(p.94)。

お接待を受けることはCさんに大きな影響を及ぼした。野宿かつ托鉢で歩き遍路をしていたCさんにとって、食べ物などのお接待や休憩所や宿泊できる場を設けていてくれることは、食・住という生きることに直接的に関わる行為であり、助けられている感覚は強いものだったのではないだろうか。また、温かい励ましは、精神的な支えとなったと思われる。野宿・托鉢という状況におけるお接待がある四国遍路空間は、生かされていることへの気づきに大きく関わる重要な要因であったと考えられる。

付記：本研究は、南山大学研究審査委員会における倫理審査を受け、2016年1月に承認されている。また、公刊前にCさんに内容の確認を依頼した。内容を確認し、公刊の許可を得た。

本研究にご協力いただいたCさんと貴重なコメントをくださった査読者に深く感謝の意を表します。

引用文献

- 藤原武弘(2000a).自己過程としての巡礼行動の社会心理学的研究(2)―四国遍路体験者のケース・スタディー 関西学院大学社会学部紀要, 85, 109-115.
藤原武弘(2003).自己過程としての巡礼行動の社会心理学的研究(6)―四国

- 遍路手記の内容分析— 関西学院大学社会学部紀要, 93, 73-91.
- 福島明子 (2004) .大師の懐を歩く—それぞれの遍路物語 風間書房
- 福島明子 (2006) .遍路空間の意味空間と体験過程 お茶の水女子大学人間文化論叢, 9, 399-409.
- 楠本和彦・境徳子 (2017) .四国遍路に関する心理学を中心とした文献研究 アカデミア人文自然科学編 13, 南山大学, 99-122.
- 楠本和彦・境徳子 (2018) .歩き遍路の遍路者にとっての意味と日常や生き方に及ぼす影響についての考察 (1) —Bさんの語りを通して— アカデミア人文自然科学編 15, 南山大学, pp41-61.
- 黒木賢一 (2009) .四国遍路における臨床心理学的研究 (1) —遍路セラピー事始め— 大阪経済大論集 59 (6), 55-74.
- 黒木賢一 (2012a) .四国遍路における臨床心理学的研究 (2) —遍路道空間と接待文化— 大阪経済大論集 63 (3), 77-98.
- 境徳子 (2016) .四国遍路という非日常体験の効果と影響について 南山大学人文学部心理人間学科提出研究プロジェクト論文 (未発表), 1-57.
- 高橋順子 (2012) .四国遍路「お接待」に潜むケアの要素—遍路体験記の分析から— 四国大学紀要 (A) 37, 91-102.